



TITLE:

京大広報 No. 514

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 514. 京大広報 1997, 514: 258-269

ISSUE DATE:

1997-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209232>

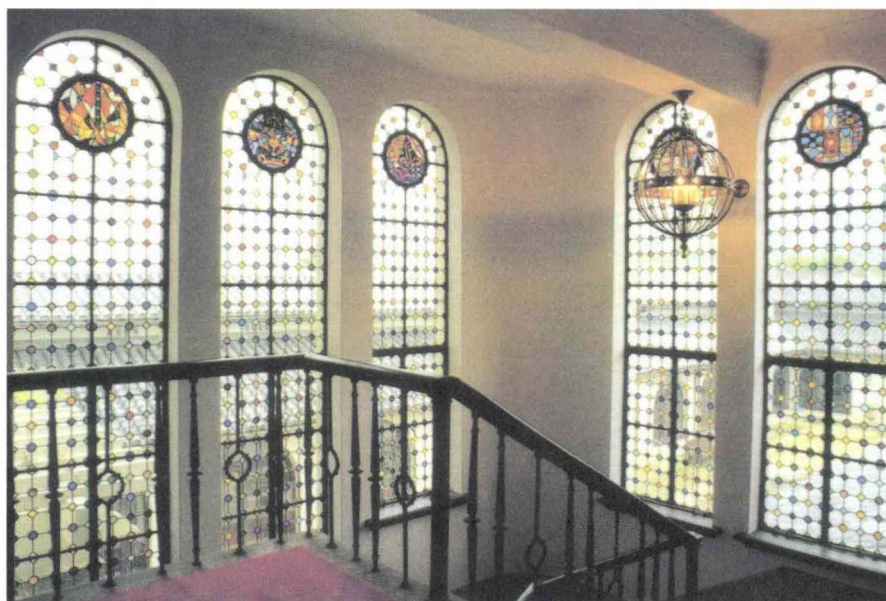
RIGHT:



京大広報

No. 514

1997. 6



改修された人文科学研究所分館

目次

〈大学の動き〉

部局長の交替等259

寄附講座「水質源質総合計画講座」の設置259

〈部局の動き〉

故辻 正美教授法学部葬259

〈日誌〉259

〈荣誉〉

小澤和惠名誉教授が紫綬褒章を受章260

〈紹介〉

大学院農学研究科の重点化について260

〈訃報〉262

〈文化交流〉

花と緑の街・キャンペラ 澁谷 拓郎262

〈随想〉

秩序—無秩序現象 名誉教授 上田 顯264

〈京都大学の百年（第25回）〉

創立記念事業の歴史265

〈洛書〉

‘食’にかかわる量と質 廣瀬 正明266

〈資料〉

平成9年度京都大学職員研修実施計画267

平成8年度予備的経費配分実績267

〈公開講座〉

医療技術短期大学部第10回 健康科学公開講座

～豊かな生活とコミュニケーション～268

大学院理学研究科数学教室公開講座

「現代数学展望」269

京都大学広報委員会

大学の動き

部局長の交替等

食糧科学研究所長

鬼頭 誠食糧科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として森 友彦食糧科学研究所教授（食品構造機能研究部門担当）が6月11日食糧科学研究所長に任命された。

任期は平成12年6月10日までである。



森 友彦教授

寄附講座「水資源質総合計画講座」の設置

平成9年4月17日、大学院工学研究科に寄附講座「水資源質総合計画講座」が設置されることになった。

概要は次のとおりである。

1. 部 局 名 大学院工学研究科
2. 名 称 水資源質総合計画講座
3. 寄 附 者 株式会社 クボタ
代表取締役社長 三井 康平
4. 寄附金額 総額150,000,000円（分割納付）
5. 設置期間 平成9年4月～平成12年3月
（3年間）
6. 担当教員
教授相当 市川 新
助手相当 増田 貴則

7. 研究目的

歴史的に、個別利水ごとに計画・管理されてきた水資源の質の管理と諸施策を総合化することの効果を、最近の発達した計算機機能と情報処理技術を駆使して、定量的に具体化していくことを目的とする。

8. 研究内容

総合計画的手法に関する基礎的研究を行うとともに、琵琶湖・淀川流域を対象としてとりあげ、国際比較をも行いつつ、水資源の質的改善に関する総合的方策を確立する。

9. 研究課題

- (1) 総合計画のための新評価法の開発
- (2) 琵琶湖・淀川全流域の詳細モデルの確立
- (3) 水資源の質的改善に関する総合的方策の作成

部局の動き

故辻 正美教授法学部葬

本年4月24日逝去された故辻 正美教授の法学部葬が法学部主催により、5月24日（土）午後2時か

ら3時まで、法経第七教室において執り行われた。
（法学部）

日誌

1997年4月1日～4月30日

- | | |
|----------------------|-------------------------------------|
| 4月7日 名誉教授称号授与式 | Haji Yusof Bin Haji Abdul Hamid 大使他 |
| 〳 退官教授懇談会 | 2名来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 〳 医療技術短期大学部入学式 | 16日 国際交流委員会 |
| 〳 医療技術短期大学部名誉教授称号授与式 | 22日 評議会 |
| 8日 評議会 | 25日 中華人民共和国 武漢大学 候 杰昌学 |
| 11日 学部入学式 | 長他4名来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 〳 大学院入学式 | 〳 同和・人権問題委員会 |
| 16日 ブルネイ・ダルサラーム国 | 30日 環境保全委員会 |

栄誉

小澤和恵名誉教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、小澤和恵名誉教授が、平成9年4月29日に、紫綬褒章を受章された。

以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。



小澤和恵名誉教授は昭和31年京都大学医学部医学科を卒業、同36年大学院医学研究科博士課程を修了後、同年京都大学医学部外科学第一講座助手となった。当初脳神経外科学を専攻したが、同42年より肝臓外科に転向、同47年医学

部講師、同56年助教授を経て同59年教授に昇任し、外科学第二講座を担当した。平成5年、退官と同時に滋賀医科大学副学長（病院長）、同9年より同大学学長に就任し、現在に至っている。

同名誉教授の研究分野は外科学であるが、大学院時代より生化学、特にミトコンドリアの研究に焦点が絞られてきた。長年にわたる基礎的研究は、肝ミ

トコンドリア機能を血中ケトン体比の測定により把握する「小澤レドックス理論」として結実し、臨床的に応用されている。即ち、この理論により肝が全身のホメオスタシスの中心的役割を果たすことを明らかにし、単に肝臓外科のみならず移植医学、救急医学、心臓血管外科の領域で利用され治療方針決定に直結している。

この理論に基づき生体部分肝移植を手がけ、その成績は国際的に高い評価を受け我が国初の移植免疫医学講座開設を京都大学医学研究科にもたらす基礎となった。本学における生体部分肝移植は現在すでに約300症例に実施されている。これら一連の業績に対し、平成2年京都新聞文化賞、同3年武田医学賞、中山恒明賞を授与された。

（大学院医学研究科）

紹介

大学院農学研究科の重点化について

大学院農学研究科は、昭和28年4月に、農学専攻、林学専攻、農芸化学専攻、農林生物学専攻、農工学専攻、農林経済学専攻、水産学専攻の7専攻で発足した。以後専攻の増設をみて、同44年に林産工学専攻、同46年に食品工学専攻、同51年に畜産学専攻、同56年に熱帯農学専攻がそれぞれ設置され、11専攻をもって農学の教育・研究を体系的に行ってきた。農学研究科は国際的に顕著な研究業績を挙げ、多くの優れた研究者を輩出するとともに、実学面でも、我が国の農学の中心として、高度な技術者、指導者を養成してきた。

近年世界人口の急増と地球環境の悪化により、食料の自給的安定生産、国土資源の管理及び環境保全が人類にとって重要課題となり、学術も国際的視点に立って、自然科学から社会科学までを包括した総合的教育・研究の遂行と、世界の諸問題解決に貢献



し得る研究者の育成が求められるようになった。これに対応するため、農学研究科においては、広範囲にわたる高度な教育・研究と農学の特色を活かした総合的、学際的専門分野の研究を促進するとともに、学部においても4年一貫性による基礎専門科目教育の充実が必要となってきた。このような経緯から、農学教育・研究の体制整備を目的として、特に大学院における専攻を再編成する構想が具体化するに至った。

その概要は、研究方法を共通にする講座統合により従来の11専攻を6専攻に再編し、人事の流動化と新研究分野への柔軟な対応促進のために大講座制を採用するとともに、教育・研究の母体及び管理運営の単位を学部から研究科へ移行（予算部局化）することであった。この大学院重点化構想は平成7年度より実施に移され、地域環境科学専攻、生物資源経済学専攻、森林科学専攻、応用生物科学専攻、農学専攻及び応用生命科学専攻が順次設置されることによって、同9年4月に6専攻37講座（7協力講座を含む）76分野（3外国人客員分野を含む）の大学院農学研究科が新たに発足した。

新しい「農学専攻」は、従来の農学専攻を基幹講座に、農場を協力講座として整備されたものであり、「森林科学専攻」は、従来の林学専攻及び林産工学専攻の主要部分と熱帯農学専攻の一部を基幹講座とし、これに演習林と木質科学研究所の主要部分を協力講座として整備されたものである。「応用生命科学専攻」は、従来の農芸化学専攻及び食品工学専攻に農薬研究施設の一部門を組み込んで基幹講座とし、これに化学研究所の1大部門及び食糧科学研究所の3大部門と木質科学研究所の部門の一部を協力講座として整備され、「応用生物科学専攻」は、従来の農林生物学専攻、水産学専攻、畜産学専攻に、熱帯農学専攻の一部と農薬研究施設の一部門及び植物生殖質研究施設を基幹講座として整備された。ま

た、「地域環境科学専攻」は、従来の農業工学専攻に林学専攻、農芸化学専攻、農林生物学専攻、林産工学専攻及び熱帯農学専攻の各一部ならびに農薬研究施設の教官組織の一部を加えて基幹講座とし、これに原子炉実験所の一部門を協力講座として整備され、「生物資源経済学専攻」は、従来の農林経済学専攻と農業簿記研究施設の教官組織を基幹講座として整備された。さらに、応用生命科学専攻、応用生物科学専攻、地域環境科学専攻にそれぞれ客員分野を設け、先端的研究を行っている外国人教授等を外国人研究員として招へいし、共同研究を実施するようにした。

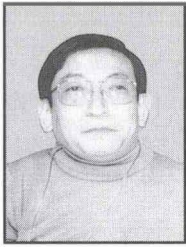
このように、大学院中心の教育・研究組織により、総合科学としての農学が目指すべき学際的・総合的研究の深化と創造的技術の開発が促進されるとともに、教官の先端的な研究を大学院における高度な専門教育に反映させ、一体化することによって次世代を背負う研究者、技術者の育成も一層有効かつ強力に行われるものと考えられる。さらに、従来の講座の枠をこえた異分野間の研究交流の機会も密となり、また、国際共同研究体制の整備による国際的対応も強化され、学際的・総合的研究の多面的推進が期待されている。

一方、学部教育面でも学部を大学院と分離された組織とし、講座制を廃止して大学科目制が導入され、従来の10学科は、農学における一次生産分野、二次生産分野、それら生産の場を包み込む生産環境分野を対象として生物生産科学科、生物機能科学科、生産環境科学科の3学科に再編された。これにより、各分野に共通する基礎的科目を系統的に教育することが可能になり、大学院への進学に際する専攻選択の幅が広がるとともに、広い基礎学力を備え、新しい研究領域に柔軟に対応できる人材を養成することが可能となった。

（大学院農学研究科）

訃報

辻 正美 大学院法学研究科教授



大学院法学研究科教授 辻 正美先生は、4月24日逝去された。享年48。

先生は、昭和47年京都大学法学部を卒業され、検事として法実務に携わった後、同50年京都大学法学部助手、同53年助教授を経て平成元年教授、同3年4月同大学院法学研究科教授となった。

先生は、他人の財産の管理に関する法制度の研究に取り組み、この分野での代表的業績である「受託者の背信的処分の効力について」を著された。

また、先生は遺留分制度や遺言に焦点を当てた相続法制の比較研究、著作権法及び不正競争防止法を中心とする知的所有権法の研究に、実務経験と判例についての比類なき知識を基盤とする鋭い分析を展開された。さらに先生はコンピュータを駆使し、データベースからエキスパートシステムまでを統合した法情報システムの開発に取り組み、この分野の第一人者として活躍された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院法学研究科)

文化交流

花と緑の街・キャンベラ

澁谷 拓郎

私は平成7年3月から12月までの10か月間、文部省在外研究員として、オーストラリアのキャンベラにあるオーストラリア国立大学地球科学教室でオーストラリア大陸東部の地殻構造に関する研究を行いました。

キャンベラはオーストラリアの首都ですが、人口は30万人程度で、首都としては比較的小規模です。1927年にウォルター・グリフィンの設計により建設された計画都市です。市の中央には、彼にちなんで名付けられたバーリー・グリフィン湖（人造湖）が東西に横たわり、その北側はシティーと呼ばれる市政庁区、南側はキャピタルヒルにそびえる国会議事堂に象徴されるように連邦の行政区になっています。

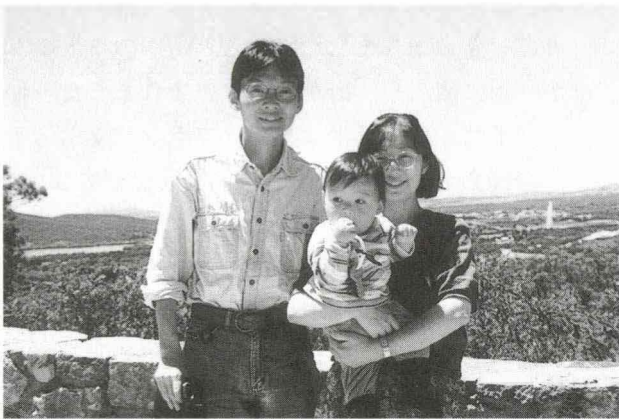
キャンベラでは四季の変化がはっきりしています。私が到着した3月は秋の始まりでした。秋の盛りには街中や近くの山の木々が紅葉してきれいでした。これはキャンベラの建設にあたり国外から紅葉する樹木を植樹したためということです。ちなみにユーカリの木は常緑樹です。キャンベラは標高500mにあるので、7月半ばから8月初めの冬季の夜間には零下数度まで冷え込みます。そのような日の朝には、湖からの霧が市街に溢れ、景色は幻想的なものになりました。8月の半ば過ぎ、まだ寒い

中、あちらこちらで黄色い小さな花が咲き始めます。この木はワトルツリーと呼ばれ、オーストラリアの国の花になっています。そして全く突然春がやってきました。夜間の気温が零下まで下がらなくなると同時に、日中の気温も15℃程度まで上がるようになり、過ごし易くなりました。すると街中のワトルツリーが一斉に開花し、街が春色に包まれました。仲春、9月半ばから10月半ばまで、フラワーフェスティバルが催され、街を挙げて花の季節を祝います。主会場の湖畔のコモンウェルスパークには、何万株ものチューリップが咲き乱れ、それは見事でした。

私は、キャピタルヒルの少し南のフォレストという地区にある、大学のハウジングオフィス所有のフラットに住んでいました。私のフラットは、2階建てで、4世帯入っていました。向かいにはインドネシアのチモールからの家族、上には中国からの家族が住んでおられました。私のフラットのある一画には、同じ様なフラットが10軒ほど広い中庭を共有して建っていて、その中庭には、ブランコ、シーソーなどの遊具や、大きな骨だけのビーチパラソルのような物干し傘がありました。ハウジングオフィスは、このような物件をいくつか所有しており、大学の職員や外国からの研究者・留学生に市価よりやや安い価格で賃貸することをやっています。ちなみに私のフラットの家賃は、週約12,000円でした。このよう

な制度を日本の大学でも採用できれば、外国からの研究者や留学生を招聘しやすくなると思います。

オーストラリア国立大学はシティーの西側、アクトンと呼ばれる地区にあります。南北に約1.5km、東西に約1kmという広いキャンパスをもっています。京都に当てはめると、今出川通りと丸太町通りおよび東大路通りと白川通りに囲まれた範囲に相当します。キャンパス内には、オーバルと呼ばれる、クリケットやラグビーやサッカーなどのための芝の運動場が4つもありますし、芝生の広場やユーカリの林など緑が多く、とてもゆったりしているという印象を受けました。地球科学教室は、キャンパスの南側、バーリー・グリフィン湖の近くに 있습니다。私の研究室の窓の外には、桐に似た木があり、その長さ30cmくらいの豆のような実をついばみにいろいろな鳥がやってきました。黄色い冠羽をもった体長40cmくらいの白いオウム、緑の羽に赤い体の20cm位のインコなど、オーストラリアの鳥は総じてとてもカラフルです。私は研究室ではほとんど一日中、コンピュータの前に座って、地震波形の解析と新しいインバージョン法の開発を行っていました。疲れる



と気晴らしのために図書室に行って、新着のジャーナルなどを見ました。図書室の閲覧室から見る湖の風景はとても美しかったことを覚えています。

私が所属していた地震学講座には、私と同年代の4人のリサーチフェローがいました。アイスランド出身のオリ・グッドムンドソンさん、アメリカ出身のフィル・カミンスさん、イギリス出身のマルコム・サンブリッジさん、オランダ出身のロブ・バンデルヒルストさんです。講座主任は、英国ケンブリッジ大学出身のブライアン・ケネット教授です。彼は「建根人」という印鑑をもっているくらい知日派の人です。リサーチフェローは任期が1ないし3年の研究者です。けれども彼らの生活は実質的には安定しています。これは、ケネット教授と彼らとの間の信頼関係に負うところが大きいと思います。さらに、彼らは自分の研究に専念できる環境の中で働いています。日本では最近、大学教員の任期制の法制化が大きな問題となっていますが、実質的に安定な研究生活が保証されないような制度のもとでの任期制はうまく機能しないと思われます。

写真は、キャンベラの市街が一望できるレッドヒルの展望所で撮ったものです。右端中程に国会議事堂のあるキャピタルヒル、その左斜め上にキャンベラ名物の140mジェット噴水が見えます。長男豪志（ごうし）は、私がオーストラリアに出発する10日前に生まれました。キャンベラで一緒に生活をするようになるまでの9か月間、育児はすべて妻が受けもってくれました。その分、私は研究に専念することができました。キャンベラでの10か月間は、私にとって非常に実り多いものになりました。

（しぶたに たくお 防災研究所助手）

随想

秩序—無秩序現象

名誉教授 上田 顯

平成4年より福井県立大学に勤めているが、経済や生物資源系の人たちとつき合いが広がり新しい見聞ができるのは楽しいことである。



30年ほど前、全国的に吹き荒れた大学紛争が起こる直前のころのことである。私は秩序—無秩序現象のミクロな様相を調べるために計算機実験を行っていた。まだ京都大学に全国共同利用大型計算機センターの姿はなく、計算機に苦勞する時代であったが、3人の同級生を含む5人のグループのチームワークもよく、よい仕事ができたと会えばいまでもその話になる。実はこの仕事の内容は、私には大学紛争、オイルショックなどの社会現象と二重写しになって私のものの見方に影響しているようである。

秩序—無秩序現象とは、磁石に例をとると、臨界温度 T_c と呼ばれる転移温度以上に熱すると、磁性を失って磁石の用をなさなくなってしまう一種の相転移現象である。磁性をもつ最小単位の個体（スピンと呼ぶことにしよう）の無数の集まりからなる磁石は、低温では各スピンの向きが整然と揃って強い磁性を示すが、温度を上げていくと、向きを反転するスピンが少しずつ増えていく。ところが温度が T_c をわずかでも越えたと、その割合がなだれのように急増し、磁石全体として磁性を示さなくなってしまう。計算機実験ではこの臨界温度の近傍でどんなことが起こっているのか、時々刻々スピンの反転していく様相を映画化して調べたのである。みると、温度が T_c の近傍では同じ向きのスピン同士があらこちらでグループ（クラスター）をつくり、 T_c に近い温度ほど、グループは大きくなっていく。グループはくっついたり、分裂したり、大きな揺らぎの中であって、向きの異なるグループ同士は相互に入り組んだりして、その形を複雑に変えていくのである。

この映画ができて半年後、69年1月には京都大学も大学紛争の渦中に突入した。そして狂気の三日間と言われる吉田キャンパスの逆バリケード事件が発

生した。ほんの二三時間の間に吉田キャンパスの周りは椅子、机、戸棚で囲まれ、無秩序なキャンパスに一転したのである。また73年にはオイルショック、電気料金が60%もはね上がりトイレトペーパーの買い占めがブラウン管を独占した。なぜ多くの人が、日頃は各人それぞれの生活を送っていながら、急に行動を起こすように変化するのだろうか。ベルリンの壁の崩壊もまたしかりである。

スピンは多数が集まって集合体になると、集団としての性質を現わす。スピンに限らず、一般に個体同士にはある種の秩序を保とうとする相互作用がある。低温では個体が多数になるほど秩序を保つ傾向は強まる。こうして強い磁石になる。ところが熱はスピンが揃うのを乱す擾乱であり多数なほど乱れ易い、つまりエントロピーを増やす役割をする。温度を上げていくと、相互作用のエネルギーによって秩序を保とうとする傾向と、それを乱しエントロピーを増やそうとする傾向との拮抗状態が続くが、臨界温度で一気にバランスが崩れ無秩序の状態に転移するのである。

乱暴な話であるが、個性を無視して人を個体に例えたと、社会で起こる現象にも似たような現象として捉えられるものがありそうである。そして人々との間の相互作用は情報の授受ではなかろうか。もし誤った情報を流さなければ逆バリケード事件は起こらなかっただろうし、TVで放送しなければトイレトペーパーの値上がりはあまり伝播しなかったのではなかろうか。では温度にあたるものは何だろうか。温度は環境を指定する重要なパラメータであるが、鉄粉が磁石で揃うように、電場、磁場によっても秩序を作り出すことができる。ただ社会現象の場合、秩序ある状態がどんな場合にもよい状態とは限らず、無秩序がいつも悪い状態とは限らないことは思想的な問題を想定すると分かる。環境は対象とする社会システムとそれを分析する視座によっていろいろであろう。経済システムなどではまだ量的なパラメータを探しやすいように思えるが、心理学的問題ではどうなるのだろうか。さらに個性のある個体になるとどうなるのであろうか。すでに生態学や社会学の分野で取り扱われているに違いないと思うの

であるが。

30年前の仕事は今でもこのような連想をさせてくれる。

(うえだ あきら 元工学部教授 平成3年退官
専門は統計物理学, 計算物理学)

京都大学の百年 (第25回)

創立記念事業の歴史

周知のとおり、今年創立百周年を迎える京都大学では、11月2日の記念式典を中心に様々な行事が準備されている。京大百年の歴史のなかで、創立記念をこのように盛大に祝う行事にはどのようなものがあったのだろうか、簡単に振り返ってみたい。

創立記念の祝日そのものは、創立直後の1898(明治31)年から存在したことは、すでに本連載でも述べた(連載第21回、「京都帝国大学における祝日の変遷」、『京大広報』No506)。そしてその祝日が何回も変更された事情についてもそこで述べたとおりである。このように創立記念祝日とそれに伴う式典は早くから行われていた。行事の中身としては、当初はいわゆる儀式のみであったが、史料によるとおそらく1905年ごろから、年によって違いはあるが、講演会を開催したり、観覧券を要所に配付して学内開放を行ったりするようになったらしい。

上述のような毎年の式典とは別に、ある特定の年限を区切って大々的に創立を祝う事業の最初は1922(大正11)年の創立25周年式典である。「25」という数字を区切りと見る考え方はおそらく西洋式の紀年の導入とともに採り入れられたものであろう。京大でも創立後しばらくすると、欧米の大学の「百年祭」「五百年祭」等に招待されることが多くなってくるが、自らの大学でも同様の式典を、という思いが構成員に強くなったとしても不思議ではない。ちなみに東京帝国大学では、一足先に1902年に「大学創立二十五年記念式典」が計画されていた(ただし理由は不明だが、この式典は挙行されなかったらしい)。さて記念行事の中身だが、久邇宮邦彦王・多嘉王を招いた式典のほか、勤続者表彰、記念講演、絵はがき配付、学内開放・展示、祝宴、園遊会などが6月18日から20日にかけて行われた。このうち勤続者表彰は25周年で初めて実施され今日まで続いているものであり、大学主催だった園遊会はこの2年後に学

生主催に生まれ変わり、今日の学園祭の淵源的な位置を占めた(連載第22回、「京都帝国大学における祝日の変遷(続)」、『京大広報』No508参照)ように現在まで続く行事がいくつか25周年で始まっている。さらに、25周年を記念した募金によって楽友会館が建てられた(写真参照)ことも忘れてはならない。

次の大きな区切りは1947(昭和22)年の50周年だった。学内では準備委員会が設置され、そこでは様々な企画が提案されたようである。まず注目されるのは、創立記念日の6月18日には名誉教授の懷古談のみ行い、大規模な記念祝賀式は10月下旬(25~31日)に催されたことである。これは準備委員会の議論のなかで、6月18日は梅雨時であり食べ物の腐敗が懸念されたこと、4月5月は入学直後で慌ただしいことなどを理由として秋の開催が決定されている。70周年式典や今回の百周年式典もこの時の決定を踏襲しているわけである。その祝賀行事の中身としては、当該時期の授業を休止した上で、農学部グラウンドでの記念祝賀式に始まり、学内開放、講演会の開催のほか、映画の上映、美術や京大の歴史の展覧会、模擬法廷、弁論大会、さらには野球大会や運動大会なども行われた。この祝賀行事は開催の規模でいえば、25周年式典はもちろん後年の70周年のそれも上回るものであった。そして注目すべきことの第二は、主催に京都大学とならんで京都大学同学会の名がプログラムに記されていることであった。学生の主体的参加ということは準備委員会の当初から言われていたことであり、実際に行われた催しの半分以上は同学会的主催になっていた。前述した昭和初期の園遊会がいつとき復活した形であった。

50周年では、このほか多数の学生を収容できる学生記念会館の建設や大学叢書の刊行なども計画されたが、1947年という敗戦直後の諸事困難な時期だった

たせいか、これらの計画は実現しなかったようである（実際、この前年には食糧事情の悪化のため夏季



楽友会館（1930年頃）

休暇が6月17日からに繰り上げられ、創立記念式典が延期されるということもあった）。

その次の記念事業は1967（昭和42）年の70周年で、記念式典（11月3～5日）、『京都大学七十年史』の刊行、総合体育館の建設、大学会館の建設、国際学術交流のための奨学資金の設定が実施されたが、まだそれほど時間のたっていないことでもあるし、ここでは詳細は述べてない。

創立記念事業にはいろいろな意味付けが可能だろうが、大学の歴史と未来を考える好機であることは間違いない。「100」という初めての大きな区切りを迎えるにあたって京大が自らの歴史をどう考えるか、大きな課題だといえよう。

（百年史編集史料室）

洛書

‘食’にかかわる量と質

廣瀬正明

「トンカツを食べてよく寝るとフトル」。これはトンカツを中傷しているのではない。筆者の少年時代、京都の市電でいつも見かけた、トンカツ店の広告コピーである。大丸の向かいにあるこの店は、今も繁盛している。飽食となった日本も、高度経済成長以前には、肥満をリッチの象徴として憧れていたことをこのコピーは示している。人口に対する食糧の量的供給がぎりぎりの時代にあつては、収入と体重は正の相関を示すのであろう。このような状況は戦後の特殊事情によるのではなく、日本の歴史では程度の差はあっても普通の状態であつたろうことは、庶民の生活がリアルに描かれた絵巻物を見れば容易に想像がつく。例えば、平安時代の『粉河寺縁起』では、長者の夫婦とその娘は下ぶくれの太めの顔であるのに対し、従者らは全て頬の落ちた瘦顔で描かれ、明確に区別されている。さらに極端なのが、鎌倉時代の『病草紙』の中の「肥満の女」で、高利貸でもうけた女が過食で肥満となり、侍女の助けでかろうじて立っている。後方には、路上に座り込んだ瘦せた女が乳児に乳を与えている様子に対比して描かれている。

これに対し現代の日本は、食バブルとも呼べる観

を呈している。男性で大体7人に1人、女性で5人に1人が肥満状態にあるという。「ダイエット」が日常会話に定着し、ファッションにすらなっている。食が量的に充足された状況下では、食の軽視、過激なダイエット、極端な利便性の迫及といった困った現象もあるが、健康食ブームにみられるように、質的な面で食に対する関心が高まっているのは悪いことではない。テレビでは毎日のように健康食品関連の番組が放送され人気を博している。このような中、栄養・食糧科学の研究動向をみても、食の質的な面を追求する研究が近年大変活発で、優れた成果をあげている。しかし、グローバルな視点にたてば、飢餓が日常化している地域が少なくなく、人口増による食糧不足も懸念される。また、日本の恵まれた現状が来世紀も続くという保証はない。従来の農薬・肥料の高度散布による食糧増産のやり方には、生態系・環境との調和の面から限界がある。基本的栄養素をいかに量的に確保するか、豊かな国に住む研究者にとっても、重要な研究課題であることに変わりはない。

（ひろせ まさあき 食糧科学研究所教授）

資料

平成9年度京都大学職員研修実施計画

平成9年度における研修実施計画は、次のとおりです。

今年度から新たに「幹部職員セミナー」と「課長補佐級研修」が実施されます。

研 修 の 名 称	実 施 時 期	対 象	予定人数	研 修 場 所	備 考
新 採 用 職 員 研 修	4/7～4/10 (4日間)	新採用職員 (他機関を含む)	59	国立若狭湾少年自然の家	4/7 附属図書館
主 任 研 修	9/9～9/12 (4日間)	主任 (他機関を含む)	60	国立曽爾少年自然の家	9/9 附属図書館
係 長 研 修	10/21～10/24 (4日間)	係長 (他機関を含む)	50	国立曽爾少年自然の家	10/21 附属図書館
技術職員研修 (第18回)	7/15～7/17 (3日間)	行 (-) 教養系技術職員 (他機関を含む)	50	京大会館ほか	
〃 (第19回)	2/24～2/26 (3日間)	〃	50	〃	
語学研修 (英語・初級コース)	5/6～7/11 (40時間)	事務系・技術系職員	16	工学部国際交流室	週2回午後1回2時間
〃 (英語・中級コース)	10/3～12/12 (40時間)	事 務 職 員	10	〃 及び放送大学	週2回午前1回2時間

幹 部 職 員 セ ミ ナ ー	9/24 (1日間)	課 長 ・ 事 務 長	30	京大会館	
課 長 補 佐 級 研 修	未定 (2日間)	課長補佐・事務長補佐・専門員	30	未定	
新採用職員研修 (Ⅱ)	4/14～4/15 (2日間)	新 採 用 職 員	33	工学部8号館413号室	
初任者教育研修 (前期)	5/14～9/30 (予 定)	新 採 用 職 員	18	工学部8号館413号室ほか	週水曜日午後
初任者教育研修 (後期)	10/8～2/28 (予 定)	新 採 用 職 員	13	〃	〃
実務講習会 (庶務系)	12月初旬 (4日間)	実 務 担 当 職 員	延べ160	京大会館ほか	
〃 (経理系)	10月中旬 (4日間)		延べ160		
〃 (施設系)	未定 (2日間)		延べ40		
〃 (教務系)	未定 (2日間)		延べ80		

平成8年度予備的経費配分実績

(職員旅費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予 算 額	33,412 千円	2. 配 分 額	33,412 千円
当 初 財 源	35,012	(1) 特 別 事 業 旅 費	7,315
節 約 額	△ 2,708	(2) 入 学 試 験 経 費	1,121
欠員充員分より繰入	1,108	(3) 各 部 局 へ の 補 足	24,976

(校 費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予 算 額	591,330 千円	(3) 厚 生 補 導 費	1,499 千円
当 初 財 源	583,737	(4) 入 学 試 験 経 費	23,014
節 約 額	△22,662	(5) 本 部 運 営 費	46,074
欠員充員分より繰入	30,255	(6) 管 理 運 営 費	41,220
2. 配 分 額	591,330	庁 舎 等 管 理 運 営 費	29,375
(1) 継 年 的 補 足 経 費	38,295	施 設 等 整 備	11,845
(2) 教 育 研 究 経 費	137,115	(7) 各 部 局 へ の 補 足	304,113
教育研究用図書整備	2,503		
教育研究用設備費	97,600		
教育研究用事業費	37,012		

公開講座

医療技術短期大学部
第10回健康科学公開講座
～豊かな生活とコミュニケーション～

医療技術短期大学部では、来る7月5日、12日、19日、26日の各土曜日に、広く一般市民を対象とする「京都大学医療技術短期大学部第10回健康科学公開講座 ～豊かな生活とコミュニケーション～」を、下記のとおり開催します。

記

7月5日（土）	言葉を越えたコミュニケーション 自閉症児とのコミュニケーション	山根 寛 助教授 小西 紀一 教授
7月12日（土）	統計で見る健康 健康情報とインターネット	大塚 研一 助教授 笹山 哲 助教授
7月19日（土）	豊かな生活の輪づくり ファミリーコミュニケーション	谷垣 静子 講師 山崎あけみ 講師
7月26日（土）	もの言わぬ臓器とのつきあい方 脳内コミュニケーション	福田 善弘 教授 野村 嶷 教授

- ◆時 間 午後1時30分開始（所要時間3～4時間）
- ◆会 場 京都大学医療技術短期大学部第2大講義室
（京大病院西構内）
（※自家用車での来場はご遠慮下さい。）
- ◆受講資格 制限はありません。
- ◆定 員 70名
- ◆受講料 6,400円（テキスト代を含め全講義を通しての受講料です。
納められた受講料は返金できません。）
- ◆申込方法 6月13日（金）までに、現金書留にて受講料、申込書
（住所、氏名、年齢、職業、電話番号を記入のこと。形式
は問いません。）、返信用封筒（80円切手を貼ったもの）
を同封の上郵送又は直接庶務掛へ持参のこと。

問い合わせ及び申込先 〒606-01 京都市左京区聖護院川原町53
京都大学医療技術短期大学部庶務掛
☎075 (751) 3903

大学院理学研究科数学教室公開講座 現代数学展望

大学院理学研究科数学教室では、来る7月28日（月）から8月1日（金）の5日間数学教育関係者をはじめ現代数学に興味のある高校生以上を対象とする「現代数学展望」を、下記のとおり開催します。

記

7月28日(月) 13:00～15:00 行列群と有限群 松澤 淳一 助手

リー群論は、現代数学の各分野の交叉点であり、その理解は研究の発展に欠かせません。

この講義では、最も基本的で重要なリー群であるいくつかの行列群の構造が、有限群によって決定されている様子を、連立方程式の解法などを例にして解説します。

15:10～17:10 微分方程式について 塩田隆比呂 助教授

微分方程式は、いろいろな現象を数学的に記述するのに使われる、一般的な言葉です。それだけに、微分方程式を解くための方法も、あるいは「解く」ということの意味自体も多種多様で、特に偏微分方程式に対しては、本当に広いクラスの方程式を一括して扱える一般論のようなものではありません。

この講義では、常微分方程式と偏微分方程式、さらに1960年代後半から理解が進んだソリトン方程式の話を中心に、微分方程式を解くということの意味と、その応用について考えたいと思います。

7月29日(火) 13:00～15:00 モジュラー形式入門 池田 保 助教授

モジュラー形式の理論は歴史的には楕円関数（すなわち複素平面上の2重周期関数）の不変量の研究から発生しました。今日でもモジュラー形式の理論は整数論における最も重要な研究テーマの一つになっています。

この講義では、モジュラー形式の理論の基礎的な部分を概観したいと思います。

15:10～17:10 行列群と有限群 松澤 淳一 助手

7月30日(水) 13:00～15:00 行列群と有限群 松澤 淳一 助手

15:10～17:10 微分方程式について 塩田隆比呂 助教授

7月31日(木) 13:00～15:00 モジュラー形式入門 池田 保 助教授

15:10～17:10 微分方程式について 塩田隆比呂 助教授

8月1日(金) 13:00～15:00 モジュラー形式入門 池田 保 助教授

◆会場 京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科数学教室第3講義室（1階南側）
（※自家用車での来場はご遠慮下さい。）

◆受講資格 現代数学に興味のある高校生以上の方

◆定員 50名（申込が定員を超過した場合は抽選による。）

◆受講料 7,400円（講座開催初日に受付へ納付して下さい。）

◆申込方法 官製往復ハガキに次の事項を明記すること（申し込みは1名につき1枚とする）。

①氏名②住所・電話番号③年齢・性別④勤務先又は学校名⑤受講目的

（郵送先）〒606-01 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科数学教室「公開講座」係

返信ハガキにも住所・氏名を記入すること。

◆申込期間 6月1日～6月30日